

《議事録》岐阜県図画工作・美術校長地区代表者会

- ◇テーマ： 持続可能な県図画工作・美術研究会の運営について
- ◇日 時： 令和7年7月31日（金） 14：00～16：45
- ◇場 所： 岐阜市立岐阜小学校
- ◇出席者： 6名 <大梅雅彦（厚見中学校長）・笠嶋誠（中部中学校長）・加納礼爾（明世小学校長）・鎌宮好孝（登龍中学校長）・岸正法（長森南小学校長）・清水也人（岐阜小学校長）※十訓>

要 約

本会議では、岐阜県の図工・美術校長の地区代表が集まり、図工・美術教育の現状と課題、特に県大会のあり方や若手教員の育成について議論しました。

会議の冒頭では、図工・美術教育における人材不足と組織の弱体化について話し合われました。参加者は、優秀な教員が現場から去っていく状況に懸念を示し、組織として彼らを支えられなかったことを反省しています。特に「デザイン」という言葉を用いて、目的や対象、目標を明確にした教育活動の重要性が強調されました。

県内地区ごとの状況報告では、教員数の減少が深刻な問題として挙げられました。地区によっては常勤教員が2～3人しかおらず、残りは非常勤講師という状況のところがあります。このような状況下で、地区の研究会をどのように維持するかが課題となっています。多くの地区では、従来の形式的な研究発表会から、教員が実践例を持ち寄って気軽に交流する形式へと変化しています。

県大会のあり方についても議論されました。従来の「授業公開→研究会→実践発表」という形式では、授業者の負担が大きく、参加者の学びも限定的であるという意見が出されました。代替案として、授業公開を必須としない形式や、夏の統一研究日に開催することで参加しやすくする案が提案されました。また、教員が自分の実践や教材を持ち寄って交流する「持ち寄り型」の大会形式が効果的ではないかという意見が多く出されました。

若手教員の育成と離職防止も重要なテーマでした。優秀な若手教員が辞めていく原因として、孤立感や自己実現の機会の不足が挙げられました。特に美術教育においては、先輩教員との交流や実践の共有が重要であり、そのような機会を作ることが必要だという認識で一致しました。

会議の後半では、今年度10月31日に実施される県大会（飛騨大会）の準備状況について報告がありました。現時点での申し込み状況は263人中32人と少なく、参加を促す働きかけが必要であることが確認されました。また、今後の県大会のあり方について、参加者からの意見を集約し、次の大会に反映させる仕組みを作ることが提案されました。

全体を通して、図工・美術教育の組織を維持・発展させるためには、若手教員が参加しやすく、実践を共有できる場を作ること、そして教員同士のつながりを大切にすることが重要だという認識が共有されました。

内容ごとのまとめ

■岐阜県図工・美術教育研究会の現状と課題：人材不足と組織の弱体化

岐阜県図工・美術教育における人材不足と組織の弱体化について議論されました。参加者は、優秀な

教員が現場から去っていく状況に懸念を示し、組織として彼らを支えられなかったことを反省しています。特に「デザイン」という言葉を用いて、目的や対象、目標を明確にした教育活動の重要性が強調されました。また、研究発表の場だけでなく、教員を育成する場としての機能も重視すべきだと指摘されました。さらに、県の採用における美術教員の位置づけや、他都道府県との連携の弱さも課題として挙げられました。

■地区ごとの状況報告

東濃地区の代表者から、地区の状況について報告がありました。常勤教員が2～3人しかおらず、残りは非常勤講師という厳しい状況の地区について説明されました。そのような中でも、教員が実践例を持ち寄って交流する形式の研究会を維持していることが報告されました。特に、全員が簡単な実践報告を提出し、その中から数名が発表するという形式を採用しています。また、校内の研究まとめを兼ねることで、教員の負担を軽減する工夫もされています。

可茂地区の代表者からは、地区の厳しい状況と県大会のあり方についての提案がありました。可茂地区でも会員数が減少しており、このままでは県大会を受け入れることが困難だと指摘されました。そこで、従来の「授業公開→研究会→実践発表」という形式を見直し、授業公開を必須としない形式や、夏の統一研究日に開催することで参加しやすくする案が提案されました。また、複数の地区が合同で開催する可能性も示唆されました。

■若手教員の育成と離職防止について

若手教員の育成と離職防止について議論されました。優秀な若手教員が辞めていく原因として、孤立感や自己実現の機会の不足が挙げられました。特に各学校で一人しかいない美術教員にとって、先輩教員との交流や実践の共有が重要であり、そのような機会を作ることが必要だという認識で一致しました。また、岐阜県から愛知県へ教員が流出している現状も指摘され、居心地のよい環境づくりの重要性が強調されました。

■研究会のあり方と若手教員の参加促進

研究会のあり方と若手教員の参加促進について議論されました。従来の形式的な研究発表会ではなく、若手教員が気軽に参加できる交流の場を作ることの重要性が強調されました。具体的には、教員が自分の実践や教材を持ち寄って交流する「持ち寄り型」の研究会が効果的ではないかという意見が多く出されました。また、若手教員が主体的に参加できるよう、テーマ設定や運営方法を工夫することも提案されました。

■県大会（飛騨大会）の準備状況と今後の方向性

今年度10月31日に開催予定の県大会（飛騨大会）の準備状況について報告がありました。現時点での申し込み状況は263人中32人と少なく、参加を促す働きかけが必要であることが確認されました。また、今後の県大会のあり方について、参加者からの意見を集約し、次の大会に反映させる仕組みを作ることが提案されました。具体的には、大会後のアンケートで次回の大会に望むことを聞き、それを代議員会で共有・議論する流れが提案されました。

■飛騨大会の具体的な運営計画

飛騨大会の具体的な運営計画について説明がありました。全体会では大会委員長の挨拶と研究についての話があり、最後に指導主事から指導・講評をいただく予定です。会場については、当初体育館で行う予定だった全体会を、研究会場で放送を聞く形式に変更することが報告されました。また、予算の関係で冊子の作成費用を抑える工夫をしていることも説明されました。

対応事項

《各地区代表者（校長）》

- ・県大会について地区の教員に周知し、参加を促す働きかけを行う。

《本部役員》

- ・県大会（飛騨大会）で参加者からアンケートを実施（次回県大会に望むこと等）し、代議員会で議論する。今後の県大会（or 夏季ゼミ）のあり方の見直しについて具体的な検討を行う。
- ・代議員会では、アンケート結果をもとに次回県大会のあり方について対話中心の議論を行う。
 - ※（例）オンライン・集合ハイブリッド開催（各地区集合開催・6地区をオンラインでつなぐ）
- ・研究部は、若手教員が参加しやすい研究会のあり方を検討し、提案する。
 - ※（例）各郡市研究会は、教員が実践例を持ち寄って交流できる「持ち寄り型」の研究会を試験的に実施する。
- ・運営部は、講師や非常勤教員も含めた全ての図工・美術教育関係者に情報が届くように連絡網の整備を行う。
 - ※「Band」について、グループ「運営部→代議員」、「各代議員（or 主務）→郡市会員」を作成し、確実に加入を見届ける。

《飛騨大会運営チーム》

- ・参加者が少ない状況も想定しながら、会場設営や進行について再検討する。